

猫 蓑 通 信

第 102 号

平成28年
(2016年)
1月31日発行
(年4回発行)



東明雅先生追悼

青木秀樹

昨年十月、早いもので東明雅先生の十三回忌を迎えました。先生は平成十五年十月二十日に逝去され、熊本市往生院の東家の墓所に西峯院蘇楊明雅居士として眠っておられます。

明雅先生は六十五才で信州大学人文学部教授を退官された後、信濃毎日新聞に掲載された「来し方の記⑩」の中で「昭和五十五年四月一日、私は満六十五才を迎え定年退官となったが、この時のよろこびは今尚忘れ得ない。『世をしのぶ仮の姿』の大学教官から、本来の姿『俳諧師』に転身することがはじめて可能になったからである。」(信濃毎日新聞・昭和五十九年三月十七日)と述べられています。

すでに西鶴研究者として一流の立場を築いておられた明雅先生が連句に情熱を注がれるようになったのは、昭和三十六年九月に根津芦丈師の講義と連句指導を受けられたのが契機で、明雅先生四十六才でした。西鶴も元々俳諧師ですから、俳諧についても研究しておられました。連句実作に関する限り、かなり晩学ということ

になります。信州大学連句会を立ち上げて芦丈師の指導で連句実作に励む一方、学者として連歌・俳諧関連の古い書物を繙き、現代の連句のありようを整理されました。明雅先生が熱心に取り組んでこられた「正式俳諧」興行は、信州大学連句会が五十巻を満尾した後、芦丈師じきじきに指導されたものを先生が引継がれたもので、正式俳諧を大事にされていました。

私が明雅先生にはじめてお目にかかったのは昭和五十九年九月でした。電通連句部が日本一の連句指導者である東明雅先生にご指導いただきけるといふ誘いに乗り、月例会に参加した時でした。先生に最初に言われたことは「何か書いてくれないと直しようがないからね」でした。その後、ほぼ毎月の定例会に出席し、十五年間で延べ百三十回以上、先生と同席したことになります。芭蕉のお弟子さんのように熱心にメモを取っておけば「明雅先生語録」をまとめることができたのにと悔やまれます。

先生の捌は褒め上手で、笑いながら「どうしてこんなことを思いつくのかねえ」などと、初心者を励ましながらか座を進められたことが印象的でした。式目はその場で教えてくださり、一直される場合も鷹揚でした。連衆として

●目次●

第百三十五回猫蓑会例会作品

東明雅師十三回忌追善脇起源心八巻

猫蓑庵明雅先生十三回忌追善書

俳諧連歌二十韻

平成二十七〜二十八年度猫蓑会正式俳諧配役

特集・明雅先生の思い出……十三回忌に寄せて

武井雅子 鈴木千恵子 林 転石 若林文伸

鈴木了斎

書評・別所真紀子著『江戸をんな歳時記』

国民文化祭がこしま2015文芸祭「連句」大会受賞作品四巻

「母も子も」 留書・棚からホールケーキ 石川葵

「武蔵の錨」「朝北風や」「高西風の」

温故知新16…お地蔵様が回り続ける意味

事務局たより

の先生は、先ず速吟であること、しかもその付句が多様であったことに驚かされました。一句一句が全く別の発想でした。ご本人が照れながら自らを「俳諧師」といわれる所以はここにある、と思つたものです。

私たちは得がたい師を失いましたが、先生の残されたものがあります。書物と心構えです。『連句入門』(中公新書)、『芭蕉の恋句』(岩波新書)、『連句・俳句季語辞典——十七季』(三省堂)の中の「連句概説」を熟読し、「猫蓑の式目」をマスターすれば、どこの連句会に行っても連句を楽しめることは確実です。猫蓑会会員の方には先生の教えに接したことを喜んでいただきたいと思います。

16 15

13 12

6 5 5

2

阿蘇山の座

脇起源心「道後の湯」 武井雅子 捌

道後の湯明治の窓の十三夜

明雅仏

枝ぶり雅色変へぬ松

雅子

誰か吹くトランプペットの爽やかに

郁子

研究室で独り書きもの

酔山

ウ 雪原の轍の跡を辿りゆく

昭

外套かけてくれしあの人

好未知

約束のダイヤのリング待つてるわ

全

弁天様の目元やさしき

郁

数騎り強行突破で採決し

山

船を操る船長の技

好

高々とワイングラスを積み上げて

山

パブルの頃を猫に語れり

好

内濠を覆ふばかりに花万朵

昭

のどかに走る自転車列

郁

ナオ 縄文の土偶を捜す弥生山

雅

大きおにぎり塩を多めに

山

若き日の麻雀仲間今市長

昭

五郎丸真似ラガー目指す子

好

マンシヨンの耐震補強やり直せ

全

破れた鍋には綴ちる蓋あり

郁

惚れたるはお師匠さんの柳腰

山

お金のかかる恋愛はいや

昭

月影を揺らし緋鯉の小さく跳ね

好

絵団扇使ふ爺は悠然

山

ナウ ニュートリノ夢の受賞に乾杯を

世界遺産のツアーカタログ

花大樹蕉風今に脈々と

ゆつくり巡る鶯の苑

連衆 東 郁子 吉田酔山 松原昭

水落好未知

雲仙岳の座

脇起源心「荒神も」

青木秀樹 捌

荒神も夜寒か露の灯がひとつ

明雅仏

厨の窓を覗く弦月

秀樹

鳥渡る自慢のカメラ取り出して

弘子

歩数メーター一万を指す

忠史

ウ 汗をふく日本手拭粋ななり

碧

武者人形によく似たる彼

弘

言つちや駄目教へないでと大声で

史

モンローウオーク モナリザの笑み

全

うたた寝に虚々あれこれの夢の中

曜子

日銀金庫簡単に開け

弘

ニュートリノ重さ計つてどうなるの

史

I種試験にトップ合格

曜

新人の歓迎会に花吹雪

碧

お玉杓子が桶にいっぱい

弘

ナオ 出開帳法螺貝の音響かせて

史

タイガースファン老いも若きも

碧

今もなほ永久欠番懐かしむ

史

英語学んで切り換へる運

曜

デモ隊は辺野古沿岸目指したる

弘

岩頭に座す絶世の美女

何よりも亭主を立てるうちの妻

差しつ差されつ時を忘れて

月の下路地裏にゐるかじけ猫

ゆつたりと湯にひたる歳末

ナウ いつまでも嬰を抱いてねんころり

先祖代々継げる肩凝り

ローカル線駅長ひとり花の谷

乗る人もなく揺れるふらここ

連衆 松原弘子 根津忠史 松本碧

前田曜子

富士山の座

脇起源心「水の秋」

鈴木千恵子 捌

水の秋昔深川橋幾つ

明雅仏

錦絵の藍浮かぶ明月

千恵子

そぞろ寒自転車レース駆け抜けて

未悠

ヘッドフォンにはエイトビートを

孝子

ウ 大納言ふつくら煮えて冬至粥

ひろみ

狐の影を作る彼の手

徹心

色事師囁く嘘は後ろから

孝

マルシェ歩けばウインクの雨

全

地の果のそんなところにも日本人

悠

重機より井戸必需品なり

み

ポーカーのダイヤ一枚足りなくて

心

喋るインコを止まらせる肩

孝

仰ぎ見るからくり時計花の街

心

画家の卵の写生のどらか

み

ナオイースターダークホースの艶やかに

悠 じゅげむじゅげむと唱へ願かけ

心 女系みな細面なる三代目

孝 杜氏の中で選ぶ入智

心 ラガーマン私はボール抱きしめて

千 凍てつくままに砕けたる蝶

心 某庵小さき止石通せんぼ

悠 電動工具置き忘れたり

全 帰省子の旅靴にも夏の霜

全 国際線の明易の窓

全 ナウ百歳のはばかりながら土性骨

心 形よけれど食へぬサンプル

み 僧のなき古寺の庭花の降る

悠 野遊びに行く園児にぎやか

連衆 柵町未悠 坂本孝子 江津ひろみ

佐藤徹心

大岳山の座

脇起源心「白波を」 鈴木了齋 捌

白波を立つる大川桃青忌

了齋 撒かれたやうに都鳥浮く

常義 サイフォンの珈琲の音うれしくて

正夫 一人暮しもなかなかに良し

京子 缶蹴りの缶置き去りの月の下

香織 村芝居跳ねスキップの子等

齋 松茸飯炊いてあなたを待つてゐる

義 わが家の鍵は予備もあるのよ

全 橋七つ一筆書きで渡りかね

京 メビウスの輪は裏か表か

夫 今日もまた日本人の浴びる花

義 泡雪の野をさまよへる影

織 庚申塚よもぎ団子をお供へし

夫 江ノ電響くごとんごとんと

義 ナオ女ありて蜥蜴閃くやうに笑む

齋 百日紅咲く下でくちづけ

京 撫でてやる頬のうぶ毛に浮いた汗

織 スポーツ吹矢健康によし

全 光陰の積ればなべて宝物に

京 曜変天目三つしかない

夫 週末はDVDで名画見る

義 炬燵にもぐる猫が先客

全 月凍つる路地の駄菓子屋閉店す

織 五十肩にはヒアルロン酸

夫 ナウ平積みめのベストセラーを手に取りて

京 忘れたころの家の掃除を

齋 花片の風紋寄せる信濃路に

夫 空高くと揚がる連風

連衆 生田日常義 國司正夫 鷺山京子

平林香織

槍ヶ岳の座

脇起源心「終の栖」 上月淳子 捌

虫鳴くや終の栖の庭十坪

明雅仏 丹精こめし懸崖の菊

淳子 論文の校閲すすむ有明に

京 製本テープ黒か茶色か

ウ 吉文 電器街競ふカレーで汗をかき

淳 夏帽斜め屈託もなく

和 突然に部屋に来る馬鹿許す馬鹿

全 穴あけないで高いパンスト

文 TPP問題かかへ決着し

泉 頁めくれば次の展開

文 謎解きにつられつついつい夜を更かす

泉 そろそろ研ぐか古い鎌の刃

文 花便り聞くや浮き立つ旅心

淳 キャンディー配る山笑ふ頃

和 ナオ餅草の箆に盛られて厨辺に

全 かごめかごめの声のひねもす

泉 どこからも埋蔵金は出やしない

全 氏索性よりドンノ采配

文 ジャイアント監督人事オーブンに

淳 これ見よがしに指輪光らせ

和 文身の観音様に這はず唇

文 凍てつく宿にウオッカ交はせり

和 月皓と雪原照らす夜の静寂

泉 水平思考で生きて行きます

ウ ナウロケットを飛ばす夢見て作文に

泉 嬰のまなこはいつも澄んでる

文 長椅子に紅茶の香る花の屋

淳 軟東風頬を撫でて過ぎゆく

連衆 青木泉水 高山鄭和 永田吉文

平成二十七年十月二十一日
於 江東区芭蕉記念館

穂高岳の座

脇起源心「道後の湯」 橘文字 捌

道後の湯明治の窓の十三夜 明雅仏

物語生み深みゆく秋 文字

ありの実を剥けば甘露の滴りて アンズ

ギンガムチエックのバッグ常用 一枝

ウ サンタさん鬚は豊かに笑み湛へ 豊美

炬辺に杯舐め膝を抱へる 霞

ぼろぼろと愛の讃歌の自鳴琴 ア

踊りあかさう君の住む街 豊

商人はお客を靴で品定め ア

砂金を掬ふ小さき匙持ち 枝

幌馬車は西へ西へと暑気の中 霞

頭痛肩凝り梅干を貼り 枝

処女作の校正済みし花の頃 ア

弥生の雨の煽やかに降る 霞

ナオ 望潮そろりと通る穴の前 豊

腕白小僧ひよいと身軽に 霞

おみやげは酒種あんぱんぬくめ餅 枝

外遊紳士会釈して過ぐ 全

丸善で万年筆を買ふ荷風 豊

二重螺旋の振れ絡まる 枝

はかなげな首に真珠のネックレス ア

遠泳済みて頬挟み合ふ 霞

耶悉茗の茶葉で占ふ恋の月 豊

宵の動物園を歩けば ア

ナウ 点描の江戸の一幅床飾

いい仕事にはみんな喜ぶ

微生物掘つて受賞す花爛漫

クラブひたすら磨くうららか

連衆 松島アンズ 西田一枝 高橋豊美

高塚霞

筑波山の座

脇起源心「初時雨」 若林文伸 捌

深川や蕎麦屋を出れば初時雨 明雅仏

蕾綻ぶ庵の山茶花 文伸

電子辞書珍鳥の啼く声にして 良子

トロッコ列車に乗つてみる旅 照子

ウ 水底に映る月影眺めをり 久美子

可愛いかしら秋袷着る 敦子

抱擁は木の実降る中きりもなし 良

すつぴんになりイケメンとなる 照

いぢめるもいぢめらるるも遠き過去 敦

明日香の像のなんとおほらかに 照

群なして押し寄せて来る避難民 良

ええつあの人が平和賞とは 久

逆あがりする校庭は花に満ち 敦

種付け飛ばす赤い風船 良

ナオ 弥生尽稿のはかどり急ピッチ 久

何でもござれウオッカテキーラ 照

少年期未知の世界に憧れて 良

じゅごんの泳ぐ暖冬的大海 全

二の腕に命と彫つた二人連れ 照

透けるネグリジエ嗚呼夢の中

取り敢へずひと幕終るT P P 敦

北斎描く富士と波濤と 久

街角で黄金虫捕るビルの月 照

ナウ 音楽堂老いも若きも総立ちに 久

透きとほるほど薄い切片 敦

花の雲無何有の郷はどんなとこ 照

ゆらゆら揺れる遠足の列 良

連衆 本屋良子 田所照子 副島久美子

武井敦子

浅間山の座

脇起源心「荒神も」 林転石 捌

荒神も夜寒か露の灯がひとつ 明雅仏

名残の月がのぞく厨辺 転石

虫時雨絶え間に友の来たるらん 遊民

防災地図をひろげ解説 明子

ウ かうばしき当りめダルマストープに 健

顔よく見たき赤い角巻 民

気がつくといつもあなたの視線あり 有子

なにがさびしいフォークシンガー 健

ビー玉に透く潮騒のほろ苦し 明

常は美酒ときに饅頭 民

描いた絵が自在に動く腹の上 有

町興しにはいつも活躍 健

飛花落花風の縁を抱きしめて 明

初虹に乗り旅をする夢 有



「文台捌き」を終えて歌膝に構え、付句を待つ執筆

ナオ 出航の銅鑼の音届け佐保姫に

テープカットは会長の役

秘書かくす裏の帳簿が発覚し

柔い地盤は底がしれない

夏休みアンモナイトの化石掘り

妻には云へぬ隠し子の事

もてる筈なぜか安らぐ自然体

布袋毘沙門弁天の幸

大原女の脛巾姿に月涼し

土用鰻を背開きにする

ナウ 上水道市中へ拓く物語

翁いつとき腰すゑた庵

連山に幾重かさなる花の雲

猫がつられてあくびうららか

連衆 内田遊民 岩崎明子 由井健

佐々木有子

健 石 有 民 健 明 民 有 健 民 有 民 有 明

猫蓑庵明雅先生十三回忌追善 俳諧連歌二十韻

秋灯恋さまさまの七部集

共に眺めん今宵名月

鎌祝うターンの子も連なりて

音もたてずに発ちしマイカー

水彩のまだ仕上がらぬ鳳蝶

危ない蜜の味を知り初め

少しだけ愛を下さいしもべより

ほたほたと雪つもる中庭

金屏風濃茶の作法ゆるやかに

顎鬚しごき翁一揖

ナオ 見送りの関所に遠嶺仰ぎつつ

地平をよぎる鳥か獣か

狙ふ的決して外さぬキューピッド

青い林檎もつひに手の中

月の下君をかくまふ夏館

洋酒の壘に父さんの夢

ナウ 横丁の和風カレーに深みあり

校正刷をめくるうららか

安曇野はいまも変わらず遅き花

春の炬燵に笑まふ俳

平成二十七年十月二十一日 首尾
江東区芭蕉記念館に於いて興行

明雅仙

郁子

淳子

路子

文子

雅子

千町

暁巳

恭子

常義

了斎

有子

忠史

文伸

良子

豊美

転石

千恵子

秀樹

執筆

平成二十七、二十八年度 猫蓑会正式俳諧配役

宗匠

脇宗匠

副宗匠

執筆

知司

副知司

座配

花司

香元

配硯

老長

生生庵秀樹

橘 文子

武井 雅子

坂本 孝子

鈴木 了斎

根津 忠史

佐々木有子

林 転石

鈴木千恵子

高橋 豊美

若林 文伸

上月 淳子



正式俳諧配役全員。明雅先生の奥様を中心に

1

「不思議に命永らえて」

武井雅子

平成二十七年十月二十一日深川芭蕉記念館において猫蓑庵明雅十三回忌追善正式俳諧が興行された。執筆は緑華亭孝子宗匠、その見事な立居振舞、堂々たる吟声は強く私の心に残った。父、明雅が逝去して早十二年、父を知る方がだんだん少なくなってきた。そんな方が折にふれ父の思い出を語ってくださる。どんな事でも嬉しい。私もよく父を思い出すが、思い出は楽しいことばかりだ。

昨夏も母、妹と松本に行き、懐かしい地を巡った。コースはだいたいいつも決まっている。松本駅から真つすく美ヶ原を仰ぎ東へ凡そ一・五キロのあがたの森公園、重要文化財の旧制松本高等学校の遺構。シンボルのヒマラヤ杉がそのまま保存されており、若かりし頃の父の記憶がたちどころに甦る。よく連れて行ってもらった父の研究室は南棟二階東のつきあたりにある。父の子育ても小さい時は気合が入っていた。小学校の夏休みの宿題に日本地図を等高線通りに厚紙を切り重ねて作るというものがあつた。

出来上がったものを木の枠に入れて提出するのだが、今のようにキットになっていない。父は、よし、と蜜柑箱の板などを利用して見栄えはあまりよくないものを作ってくれた。学校に行ってみると友達も市販の角材を使つてきれいに仕上げているではないか。先生はクラスの皆に「東さんのように下手でも自分でやるのが大事です」といわれた。私は褒められたのに、これをどう父に報告すればいいのか思い悩んで家に帰った。

なかなか言い出せなかつたが思い切つて「先生は下手でも自分でやる方がいいつて言つてたよ（信州は敬語表現が乏しい。母は、信州では犬も来た、先生も来た、と驚いていた）」父は、はははと大笑いし、私はほつとした。それ以後「下手でも自分でやつた方が、ふつふつ」というのが父のお決まりのセリフで、ニヤツと笑つた。父に頼つて、ある年の自由研究は伊能忠敬の大日本沿海輿地図、模造紙に何枚も拡大器で写しとり仕上げた。手をかけてもらったのは、父の若さと長女の特権であつた。

小学校三年の夏休み、父は私を上高地に連れていった。上高地には信州大学山岳部の大きなテントがあつた。途中の沢渡で休憩。私はバスを降りて近くの土産物屋の辺りを歩いていたのだが、そこで飼われていた猿がいきなり私に襲

いかかり、ふくらはぎをガブリとやつた。とつさのこと何が起こるかわからなかつた。私の悲鳴を聞いて父は大慌てで走つて来て、焼酎！焼酎！と叫んだ。店の人が焼酎を持つてくると父は私のふくらはぎにふりかけた。娘が猿に噛まれた、父は肝を冷したことだろう。とつさに焼酎、焼酎と叫んだ父の姿は今も忘れられない。上高地について信大のテントで学生に更に処置をしてもらつた。しばらくは右ふくらはぎに猿の歯形がくつきり残つていたが、そのうちに消えた。

テントでは珍しい事ばかり、山男が飯盒で焚いたご飯を初めて食べ、シユラフというもので寝た。フアスナーを口元まで上げ、寝ようとしてもなかなか寝付かれない。父は学生たちとお酒をのみながらいつまでも語り合つていた。翌日は梓川でイワナを捕まえた。

父は物好きでいろいろなものに手を染めた。ある日家に帰るとイーゼル、画用紙、木炭、食パンを揃えて写生するという。私がバイオリンを弾いているところを描いてくれた。絵はとも上手だった。年賀状用にゴム版と彫刻刀で探幽？ さながらの龍を彫つた。どこからか鼓を買つてきて「いよー、ポン」とやっている。ゴマ点のついた謡本を掲げて「松風」のレコードも買い込んだ。骨董屋からいろいろなものを仕

入れて来て、「どうだ、いいだろう」と自慢する。ただしどれも連句ほど長続きはしなかった。あの汚い有田の蕎麦猪口、ひよっとしたら鑑定団で「驚きの！」となるかも知れない。

父は連句にのめり込み始めてから、いつも楽しそうにでかけていった。年齢を重ねるほどにほがらかに、物事はいつもいいように解釈するようになった。私の子育てでも、それでどれだけ助けられたかわからない。

私は昭和五十二年から二十年、身寄りのない富山で子育てをした。雪に埋もれながら、父と母の信州での生活はもつともつと苦労が多かったにちがいないと思ったものだ。その富山に父と母は時々訪ねてくれた。富山は隈なく案内したと思う。井波、瑞泉寺近くの黒髪庵では井波の方々と、父蒔きの座の末席に連なる機会があった。句が出来ずにいると隣の文人さんが助けて下さった。父は文人さんに「その句、雅子にやって下さい」と言った。恩返しをしないま

2 私の宝物 鈴木千恵子

●先生と出会う

『安曇野は昏れて紫』に書かせていただいたように、私は関口芭蕉庵育ちである。

ま文人さんも逝ってしまわれた。その後私は東京に戻り、老いて行く両親に付き添いはじめて、本格的に連句を学ぶようになった。もつともつと早く、いっぱいいっぱい教えてもらっていれどと思ふのだが、肥後もつこすのDNAはしっかり受け継いでいたから仕方がない。親のやっていないことの方ばかりを見ていたのである。

平成十三年七月、父は思いもかけないガンを発症し、築地の国立がんセンターで手術を受けた。その数日後、昭和六十一年関口芭蕉庵で目の前で倒れた父を救って下さった命の恩人である川野蓼艸先生がお見舞いにいらしてくださった。術後の経過もよく、お天気が明るい病室で楽しそうに二人の会話は弾んでいた。話が連句の式目に及ぶと、父は「式目を無視して連句を巻くというのは禪をしないで相撲をとるようなもんだよねえ、ハッハッハ」と笑った（父はこの禪の例えは好きだったらしい）。それを聞いていてまだ未熟だった私は「えっ、それは大変。

連句教室に通い始めた頃のノートを開いてみる。例えば「木屋の」の巻、初折の恋だ。

宿六の為に買ひ置く般若湯

明雅

色半衿を粹に着こなす

淳子

牡丹刷毛湯上りの身のほてりつつ

千恵子

当時の女子大生上がりの私の語彙は貧困で、一直なしではとてもこの句は作れない。もともとの拙句はもう覚えていないけれど、明雅先生が「牡丹刷毛はどう？」とおっしゃったのを記

連句という土俵にあがるときは式目という禪が大事」と身にしみた。式目を守らないことはとても恥ずかしい。禪をしていないのだから。しかし決まりが多ければ着物をきて相撲をとるようなもので動きがとれない。十二単では連句は面白くない。禪さえ一本きつちりしめていればどんな世界にも自由に遊ぶ事ができる。

父はお酒がはいると独特の節回しでよく「不思議に命永らえて」と口にした。実感だったのだろう。大正に生まれ戦争を経験し、戦後の混乱から昭和、平成の豊かな時代まで、苦労も多かっただろうが仕上げだったと信じている。そして母、四人の姉、妻、三人の娘と女ばかりに囲まれた一生であったが、誠に男らしい生き方だったと思う。あの世で父は、記憶にない自分の父親とどんな会話をしているのだろうか。猫蓑庵の書齋はまだそのまま。多くの書籍と乱れない字で埋め尽くされた原稿の山と書簡の束が残されている。整理をと思っている。

憶している。魔術師のようにその言葉を取り出してくださったことよって、女性の姿態が浮かび上がるような恋句が成立していた。いつも穏やかで連衆を寛がせながら、魅力的な一巻を作り上げていく、そんな先生のお陰で連句にのめり込んでいくこととなった。

●宝物・一

初蒔きを経験したのも、関口で先生に見守られながらである。「初蒔き」の巻。

啓蟄や初捌きの座和やかに

正江

濃き紅梅を飾りたる床

清子

駆けりくる素足に春の土あげて

文人

捌きなどとは名ばかりで、大先輩がたが温かく包んでくださったっているのが分かる座である。先輩がたも皆さんおっしゃっているが、先生は

巻き上げた作品に対してとても丁寧なご指導をして下さった。口語と文語・仮名遣い・同字の

打越・カタカナの打越など、十点以上にわたって細かい校合をいただいている。そのお手紙も

開いてみて、これは私の宝物だと改めて思う。結びに書いて下さっている。

細かなことをいろいろ申し上げましたが、大筋においては合格なのですから、これから、

自信をもってお捌き下さい。よい作品を期待いたします。

遠い日にこんなにも有難いお言葉があったから、今日まで連句を愛し続けることができたのだとも改めて思う。

また、関口では先生とご一緒させていただいた忘れられない座がたくさんある。「朴散華」の巻。

朴散華 忽ち空の寂しさよ

しじまを守りて落つる滴り

新真 綿艶しつとりと仕上がりがて

清水瓢左先生が亡くなられたときの追悼の歌仙だった。

「色も香も」は、秋元正江宗匠が立机されたときの一巻である。

色も香も紫式部か小式部か

明雅

俳道照らす月の晃々

郁子

江鮭煮つめてをりし箸先に

正江

この第三までは『猫蓑庵発句集』にも収められている。でも、自慢させて下さい。その四句目は千恵子である。

にゃんこの眼して遊ぶふ子供ら

猫や子供といった四句目の常套のような付けを誇りたいわけではない。正江宗匠の立机をお祝いして先生が作られた発句での歌仙。そこに

連衆として参加できたという僥倖を、である。そして、優れた俳諧師であった東明雅と同時

代に生きたという、その時間こそが宝物であるということにも気づく。当たり前のように先生とご一坐していた、それがどんなに貴重なことであつたか。

●宝物・二

昭和から平成へと世は変わって八年、連句教室も関口から深川へと場所を移し、私なりに捌きの経験も重ねたある日、わが家に料金不足の手紙が届いた。「国民文化祭とやま」連句協会

会長賞受賞の知らせである。淡雪の信濃の国に師を思ふ

千恵子

金縷梅ひらく谷ふかき宿

千町

蒸鱧好物の母ほぐしあて

庸子

しかも発句は先生のことを詠んだもの。松本の友人のところへスキーに行ったときに、ご縁のある土地だなあと思ったら、「やあやあ」という深みのある声が聞こえたような気がして、明雅先生の大きな手を思い出した。その「淡雪の」の巻を特選に選んで下さった。審査員の一

員だった先生は、受賞を喜んで葉書を送って下さったのである。切手を貼らずに。それをお忘れになったのは、さぞや急いで知らせてくれたかったのだからと都合のいいように解釈して、私の喜びも何倍にもなった。切手のない葉書も間違いなく私の宝物だ。

このいきさつを二村文人さんがご存命のときにお話ししたら、メールが返ってきた。

君は何をするのかね、と言いたくなりますね。

夏見舞切手を貼らぬ師の粗忽

文人

「君は何をするのかね」は、先生の口癖だった。ふざけた恋句を作っては、「君は何を言うのかね」と笑われた。時として、真面目に付けたつ

もりの句にも言われたけれど。また、先生に褒められたい。そしてまた、呆れられたい。

●宝物・三

平成十五年。先生は遠くに足をお運びにならなくなつたので、私(たち)は柏連句会に伺うことになった。そこで最後にご一坐したときも、後日お葉書をいただいた。

お捌きの「春の空」の巻ウラ七句目、月の字が下に来ていること、鶺鴒は月夜にはやりませんので、次のようにお直し下さい。

鶺鴒舟無月の川に焚く篝

決して妥協されずに、作品に真剣に向き合う姿勢に頭の下がる思いだった。最後の葉書ももちろん宝物である。

●先生とお別れして

明雅先生が亡くなられて一年ほど経って、夢

を見た。「千恵子ちゃん、だめだよ」とおっしゃっていた。驚いた私が「生活態度のことで
すか、実作のことですか」と聞くと、先生は「両
方だよ」とおっしゃった。今考えると、私は

俳諧人としても未熟だし、句作の力もまだまだ
だ。先生が教えて下さったことが身についてい
ない、人に伝えられていない。そんな後ろめた
さがあつたのだろうか。

繰り返しになるけれど、明雅先生の教え自体
が宝物だ。私（たち）は先生の思い出や書き残
された物の中から連句の魅力を再発見して、そ
れを広めていかななくてはならないと切に思う。

3

俳諧の一週間

林 転石

手許に一枚の名刺がある。「信州大学教授東
明雅」とある。どのようにして頂いたのか経緯
は覚えていない。

明雅先生が山形に來られて、連句講義を行っ
たのは昭和四十六年七月である。

当時の山形大学国文科には近世文学を専門と
する教官がいなかったため、その分野の授業の
一環として明雅先生に連句に関する集中講義を
依頼したもののようである。当時の山形の国文
の教授はほとんどが東大出身であつた関係もあ
るらしい。

国文専攻でもない私がこの講義に参加したの
は、高校時代の古文教科書に歌仙「市中は」の
巻が載っており、これを講義した東京文理科大
出身の担任の先生が「俳諧こそが芭蕉文学の本
質である」と語っておられたことから、芭蕉俳
諧に興味を持っていたためである。

講義は午前三時間午後三時間、一週間の集中

講義であつた。この特別講義ではテキストはな
く、明雅先生の口述と黒板の板書とをノートに
書き留めた。式目について思い出せるのは唯一、
「観音開きは良くない」という事だけである（い
まだにこの規範を往々にして実行していない）。

連句実作の際は学生をいくつかの座に分け、
先生が巡回しながら出句を一直してその座の一
巻にまとめられていた。私の句「マルクスの書
に紙魚を見出す」を先生は「マルクスの書に漫
画見出す」と直された。紙魚が夏の季語であつ
たので避けたと思われるが、マルクス理論を擲
論したものか、実際のページに書き込みの漫画
を見出すとしたものか、いずれにしても俳諧と
はこんなものかと自得した次第である。

特に印象深いのは先生のお人柄であり、講義
終了後、先生に引き連れられて山形市内に赴き、
毎度同じ店でビールを御馳走になりながら、連
句についての事、芭蕉に関する事などいろいろ
なお話を伺った。そしてそれは一週間毎日にな
んだ（一座の後で懇親談話を行うものであると
のお教えは現在でも実行している）。

集中講義の一週間が終わり、先生が山形を離
れられる日、受講した学生はお帰りになる明雅
先生を山形駅までお見送りした。忘れられない

思い出である。

講義のあつた翌月九月、受講生有志が集まっ
て連句を試みた。捌は措かず手探りの衆議判で
あつた。

連衆の同期松浦孝一君が一巻を浄書し明雅先
生に高閲をお願いしたのが左記の作品であり、
先生の計らいで月刊義仲寺に掲載されたもので
ある。

ウラ十一句目において「彼岸花」が正花でな
いとして、ウラの三句目「午下り」を「花の昼」
との先生の斧正があり、定座から花を引き上げ
た作品となつている。「鐵男」が私。

半歌仙「鶏頭の」

空遠く鶏頭の揺れ静かなり

香代子

身にしみそむる風鈴の音

孝一

月は弓幾山河をたどり来て

栄

あと振り返る白頭の人

香

減反に心を焦がす農夫あり

孝

バイクを飛ばす霜解の道

鐵男

いそいそと夫を迎える給料日

鐵

押売の声響き渡りて

香

裏木戸で猫が囁く花の屋
 けだるき我身陽炎のたち
 フランスに夢は馳せゆくイースター
 潮騒なごむ船の出る町
 貝殻も宇宙へ続く夏の海
 蚊帳を抜け出す黒き人影
 里芋を煮ておふくろは月を待ち
 人に別れるる燕去るころ

仁 隆 全 香 仁 隆 栄

わが恋を弔う野辺の彼岸花
 グライダー翔ぶ日曜の朝
 昭和四十六年九月
 於山形市東原町沙舟庵

この作品につき先生からは「尚、この作品が半歌仙であることはいかにも残念ですので、又

孝 鐵

機会がありましたら名残の折を作って見せて下さい。連句を作るといふ事は今後きつと見直され、俳句よりもむしろ現代的な詩歌形態とされる日がきつと来ると私は考えています」との書簡を頂いた。

この講義につき専攻外の私はレポートも出さず単位も頂いていない。先生に連句のレポートを出せるようになるのは何時の事だろうか。

4

猿来荘にて

若林文伸

妙義山の東麓、松井田の市街を左手に見下ろしながら国道一八号を進めば、やがて旧碓氷峠への分岐となる。平成十四年八月二十一日、この旧峠道を二五〇ccのオフロードバイクで駆け上って、避暑中の明雅先生の山荘を訪ねた。峠は中山道の難所で、坂本宿から軽井沢まで上るばかりの通称「百曲り」といわれる百八十四の急カーブの連続である。猛暑もここまで来ればしのぎ易く、信州への帰郷の折はこの道を通ることになっていたのだが、慣れたルートとは言

うものの集中してコーナーを縫ってゆけば、一気に標高は千米を超え、深山からあつげなく広くて明るい浅間山麓へ出る。軽井沢の平坦な避暑地の家々が眼前に広がる。長野県は中央高地

と実感する瞬間である。

落葉松林の間に点在する別荘地域から、北へ少し荒れた未舗装路を上りきった山の斜面にロッジ風の家があった。時折猿も出てくるとかで、「猿来荘」と呼んでおられた。

辿り着いたとき、先生と奥様が外まで出迎えてくださった。これより先に家は無く、まさに山荘であった。バイクの身支度を解くと、早速膝送りでの三吟となった。TVでは夏の甲子園での熱戦が放映されていた。その折の二十韻は私にとって思い出深い先生ご夫妻との一卷となった。

二十韻 無題 膝送り

坂本に秋涼至る峠かな
 水引草に交る撫子
 月今宵遠来の客待ち侘びて
 新発売の切手めづらし
 この島の暮らしにも慣れ早五年

文伸 明雅 郁子 仲 雅

よりどりみどり男ワイキキ

キャスターもナイスバディを誇らしく

祇園祭の夜宮賑はふ

広前に四斗樽山と積める朱夏

学童野球祈る優勝

ナオ孫五人曾孫五人が集まりて

夢は遙かな宇宙への旅

大好きなカレイライスよ召しあがれ

ゲレンデの宿生まれたる恋

北狐名をこん吉と月の下

傘寿を過ぎて写経三昧

ナウ歴戦の勇士も今や好々爺

日永に垂らす銀の釣糸

カラオケの遠く聞こゆる花の頃

ゆるやかに巻く春のスカーフ

ノートによればこの時、十時半から始めて十四時二十分に満尾している。いろいろなお話をした。お蕎麦をすすり、洋梨をいただき、そ

子 雅 子 雅 子 雅 子 雅 子 雅 子 雅 子 雅 子 雅 子 雅 子 雅 子 雅 子 雅

知ったのだが、

B 「私は三月二日生まれです」

M 「やあ、そりゃ僕よりちよっとお兄さんだ」と言われ三人で大笑いした。

M 「独りでいるの？」

娘二人が独立し、ひとり暮らしの私に「合評会は励ます会にしなくちゃね」と言われたのだった。ちょうどその夏は先生と島村晁巳さん

との文音が進行中だったのである。合評会とは猫蓑通信第四十九号の巻頭に掲載された「深川や」の巻のことで、このときから予定されていたのであった。

お別れの際、家の裏手から浅間山が見えるバス停のような小屋へ案内され、ここがあの梅原龍三郎の、絵を描いた処と教えていただいた。その三度山から下る坂はあまりにも急で、お見

送りいただいたとき、一旦バイクから降りて手を振りたかったのだが、止めるに止められず、坂が終ればもう山荘は山の奥に消えてしまっていた。八月二十二日の消印で軽井沢の先生から

「昨日はお遠いところご苦勞様でした。」

三吟楽しくありがたう存じました」

と、お葉書をいただいた。

すべて、懐かしい思い出となった。

だくことができた。受賞を報告し、作品のご批評をお願いした手紙の返事に「金星にわく砂かぶり九月場所」という祝句が添えられていた。

この句を発句に、先生と奥様、入賞作品連衆の式田恭子さん、秋山志世子さんと私という五吟膝送りの文音で二十韻を巻いていた。二週間ほどで満尾しているが、文音のレスポンスの遅れがちな普段の私からは考えられない速さだ。私はよほど嬉しかったに違いない。

その年の春から私は新宿ACCに通いはじめ、連句教室での先生の教えに接することができたが、先生が月二回の教室に出席、後見されたのはその年一杯までで、以後はお目にかかれなないことが多かった。何かにつけ封書で作品を送ってご批評をお願いした。また、式田和子先生のご逝去の半年前から参加し、恭子さんによる継承後も参加した四宮会では、作品すべてが明雅先生に送られ、懇切なご批評、ご斧正の返信をいただいていた。連句初学の時期に先生からいただいた「おだて」による励ましと、

5

「いつそんなこと教えましたか」
鈴木了齋

明雅先生が亡くなられてから、まるまる十二年も経ってしまった。現在の猫蓑会員のうち、約三分の一はそれ以後の入会で、その方々の多くは明雅先生にお会いしたことがない。そこで今回の特集では、会員の中でも比較的若い世代であるにもかかわらず、相対的に明雅先生との長いご縁がある四人の方にお話しし、各々の知る明雅先生を語っていただくと考えた。

この四人の方々と違って、私が明雅先生の聲咳に接することができたのはたった三年間だけだ。だから、先生にお目にかかったことのない方々との「つなぎ」として、短くとも私にとっては貴重な「明雅体験」について書いてみよう。先生に初めてお目にかかったのは、私に連句

を手ほどきして下さった故・今宮水壺師の導きで出席した、平成十二年（二〇〇〇年）十月の芭蕉忌例会だ。そこで明雅先生捌きの座に連衆として加えていただいた。本号P3掲載の脇起源心の発句に頂いたのは、そのときの二十韻「桃青忌」の巻の、先生の発句だ。脇句も、そのとき脇に治定していただいた拙句を換骨奪胎したものだ。尊敬していた先生と初めて対面、一座して緊張したが、五人の座の二十韻で、無事にノルマの四句を採っていただくことができた。連句駆け出し時代の嬉しい思い出。

その一年後の芭蕉忌例会では、捌きをつとめさせていただいた。その折の二十韻を封書でお送りし、ご批評をお願いした返事のお手紙に「入門後こんなに早く例会の捌きをつとめることが出来た人は初めてです」とあった。既にそのころには先生のおだて上手に気付いており、本当かな、とは思ったが、やはり嬉しかった。

更に一年後の平成十四年九月、幸い、全国連句新庄大会で「プレ国民文化祭特別賞」をいた

書面でもいただいた多くのご教示が、その後の私の連句にとつての基礎になったと思う。

A C C 教室での明雅先生については、かつてご自身が教えたことが誤解されたり、あるいは杓子定規に解釈されて、過剰規制のようなことに結びついている事例に強く反応し、激しく否定されることが多かったという印象が残っている。たとえば、一卷途中、秋三句の二句目までが三秋の句で治定された後、次もまた三秋の候補句が出されたとき、どなたかから「三秋の三句続きは駄目だ」と指摘があった。これに対して先生は「私がいつそんなことを教えましたか」と、かなり激しい口調で叱責された。

たしかに、一卷の最初、発句と脇で三秋が二句続くのは、季が具体的に定まらず、まずい。また、季戻りは勿論いけない。しかし、一卷途中で三秋を三句続けてはいけないという式目はない。下手をすると季感に変化のない一連になりかねないが、それは式目ではなく個別の句柄と季語選択の問題だ。三秋を三句続けてはいけないというのは、何かを混同してその方が勝手に作り上げた過剰な「自分ルール」に違いない。また、句いの花の後、挙句候補に燕の句が出されたとき、どなたかから、花は晩春、燕は仲春で季戻りだから駄目だという発言があった。このときは大略、「燕は確かに仲春の頃に渡ってくるが、夏燕や帰燕という季語もある通り、その後秋までずっといる。桜の花が咲いているときは燕も飛んでいるでしょう。だから燕の句を花の後に付けても何の不自然さも感じられない

い。季戻りとは、季語が何春として規定されているか、というような形式主義的な問題ではなくて、生きた現実としてどうかということなのです」という意味の説明をされた。活き活きた現実表現としてご自身が教えた連句を、杓子定規に形骸化したものにすることは許さない、という気迫が感じられた。これらもまた、先生の最晩年の教えとして肝に銘じたつもりだ。

『連句・俳句季語辞典——十七季』（三省堂）の巻頭に、先生の執筆された「連句の楽しみ——連句の習い方、教え方」という一文が掲げられている。

その冒頭、「連句を初めて習う場合、最も大切なことは良い師を見つけることである」と筆を起こされ、文末には、自ら執筆された巻末の「連句概説」について「初心の人がまずこれを

江戸女性俳諧師のリアル 別所真紀子著『江戸をんな歳時記』

詩人、小説家、評論家で連句作者でもある別所真紀子さんが、その小説世界にも度々登場する江戸期女性俳諧師たちの発句を集め、季別の歳時記仕立てにした解説書を昨秋上梓された。

有名女性俳諧師の人口に膾炙した句はもちろんだが、多くの、これまであまり知られていなかった人達の句も収録されている。その中には有名句に引けを取らぬ佳句もあるが、著者も言

読んで連句の道に入ろうとすれば、きまつて消化不良をおこし、連句がいやになるに違いない」と書かれている。

連句は詩歌であつて受験勉強ではない。「連句概説」さえ熟読暗記すればどこでも連句ができる、といった安易な考えに対しては、先生がまた「私がいつそんなことを教えましたか」とお怒りになる姿が眼に浮かぶようだ。

私が明雅先生という「良き師」に直接師事することのできた期間は短い。だからこそ、その後は「最も大切なこと」である「良き師」の喪失を痛感し、そのことについて繰り返し考えた。その欠如を自力で埋めようと努力しても限界がある。いつになつても、道半ばにも至らない。しかしせめて、少なくとも、その欠如をいつも忘れず、自戒のよすがにしようと思う。

うように、そうでもない「凡作」も敢えて多少は収録されている。しかしそのおかげで、女性俳諧師たちの、よそ行きではない、きわめてリアルな息づかいが行間から立ち上がってくる気がする。そのせいばかりでなく、説得力ある解説文と相俟つてのことだが、書中、名句は従来以上に輝き、凡句もそれなりに活き活きとし、とても贅沢な読書体験を得ることができた。書中からランダムに、楽しい一句を拾ってみる。

初雪やそらの裏にはどれほどぞ 少女ふさ
(平成二十七年、幻戯書房刊・三三〇〇円) (斎)

棚からホールケーキ！
石川 葵

九月のある日、我が家のポストに鹿児島国民文化祭での、文部科学大臣賞受賞の封書が届きました。一般に棚からはぼた餅が落ちてきますが、今回は、棚からドーンとホールケーキが落ちてきたほどの驚きでした。

私が連句の世界に飛び込んだきっかけは、今から十年ほど前、矢崎藍先生がお持ちの、新聞の付け句コーナーに応募し、紙面に載せて頂いたことでした。

前句 (水晶玉に未来尋ねる)

あかい力サくるんと回してあすは晴れ あおい

洗濯物を干しながらふつと浮かんだ句です。

今回受賞した半歌仙は、BBS「連句わーるど」で知り合ったほぼ同じ年代の三人で巻いた作品です。この半歌仙には、辞書が必要とするような難しい言葉は使われていません(まあ、使うことができないというのが本当なのです)。普段使っている言葉で、付けと転じを楽しみ、少し生意気な言い方をさせて頂けるなら、今の等身大の自分たちの連句、現在進行形の連

句(なんて、仲間うちではかっこよく言っています)です。そして、この作品を評価していただきました事を、とても嬉しく思っています。

さて、そんな三人ですが、一人は孫つちのお世話で、もう一人はなんと！飛行機もお宿も予約が済んで、さあとという時に、骨折。結局、鹿児島へは私一人で出発です。

眼下の桜島が、ぐんぐんと大きくなり、十一月十四・十五日、第30回国民文化祭・かごしま2015文芸祭「連句」大会が始まりました。

吟行では知覧コースに参加。犬を抱いて笑ってる、まだ幼さの残る少年と仲間たち。一枚の写真のなんと重たいことでしょう。時代の波の大きさを感じます。

十五日は本大会。真つ青な空と南国の風を感じながら、会場の鹿児島アリーナへ。大きな表彰状をいただきました。31回国文祭は、愛知です。金の鯨が皆さまをお持ちしています。

何も知らずに連句の世界に飛び込んだ私を、受け入れ、指導してくださった、ころもの藍先生と猫養の坂本孝子先生、お二人との幸せな出会いは、私の宝物です。感謝の言葉は、てんこ盛りにしても足りません。そしてもう一つの幸せは、猫養の皆さまから沢山頂いた「おめでとう」の五文字と、撰者の故・式田恭子様が、この半歌仙を選んでくださった事です。

藍先生と孝子先生の背中を見ながら、終わりのない連句の海を渡っていくつもりです。

春立つやバックミラーのあくび猫 葵

文部科学大臣賞

半歌仙「母も子も」 石川 葵 捌

母も子も勝気に生きる冬日かな 葵

窓辺に飾る蝦蟇葉仙人掌 唯

遊歩道珈琲の香の漂いて 葵

アマチュアバンドドライブ始まる 唯

あごひげをくつきり照らす望の月 葵

小枝装う蠟燭の斧 唯

ウ 秋の湖キヤラバンサライ夢の跡 葵

恋の遍歴重ねアラフォー 唯

君の傍ずつと居たいとくどかれて 葵

阿修羅の像にひそむ激しさ 唯

鉄棒で大技みごとエース決め 葵

ピルケースには痛み止めあり 唯

月の街商談終えて注ぐ麦酒 葵

あんばいの良い瓜漬の味 唯

神棚に隠すへそくり楽しみで 葵

手にのるほどの雛の貝桶 唯

花びらの舞うさま嬸ただ見蕩れ 葵

開聞岳にかかる初虹 唯

連衆 鳥海 唯 佐藤ふさ子

平成二十六年十二月九日首

平成二十七年一月二十七日尾 文音

鹿児島県知事賞

半歌仙「武蔵の錨」

両吟

春の海水漬く武蔵の錨かな ふう
 初雷の遠き鳴動 常義
 耕を了へて憩へる小屋陰に う
 藍匂ひ立つ首の手拭 義
 無骨なる男品佳き月見膳 う
 をだまき蒸しは銀杏を入れ 義
 居留地といふ異国にて秋惜しむ う
 坂下り来る赤い雨傘 義
 兄さまとあんなに親しくお話しに う
 幼き恋の無軌道は常 義
 噴煙の時にはげしく桜島 全
 犬連れてゆく町に風死す う
 夕月に山鉾の揺れ見てをりぬ 義
 機材整備を急ぐ写真部 う
 メモを取る手帳のサイズさまざま 義
 投句箱から投句あふるる う
 名園を巡ればほろろ帰り花 義
 酒蔵閉づる頃の夕凍み 執筆

連衆 木村ふう 生田日常義

平成二十七年三月七日首
四月七日尾 文音

第三十回国民文化祭鹿児島県実行委員会会長賞

半歌仙「朝北風や」

両吟

朝北風や余りあるもの吹き払ひ 柳下
 寒稽古とて素振り百回 真而子
 うたの友中央駅に出入迎へて 下
 地産地消で当てた商売 而
 山葡萄絡む垣よりオーボエが 下
 金兔指さし笑ふ背の子 而
 あをによし奈良の伽藍の銀やんま 下
 君の戸を自由に潜る猫妬し 而
 みんな筒抜けだつた秘めごと 全
 真珠湾コバルトブルーの波静か 而
 ジントニツクに月と干し河豚 下
 転んでも抱いて放さぬ冷やし瓜 而
 へのへのもへじ書いておしまひ 下
 霽晴れて米寿の旅は佳境入り 而
 麦を踏み継ぐ谷あひの糧 下
 ゆうらりと寄りつ離れつ花筏 而
 紙風船を畳む文机 執筆

連衆 平林柳下 上田真而子

平成二十七年一月二十八日首
二月二十一日尾 文音

鹿児島県連句協会会長賞

半歌仙「高西風の」

鈴木了斎 捌

高西風の刷毛の染めゆく一樹づつ 了斎
 コーラス隊の仰ぐ昼月 靖子
 とこよ虫羽化の姿を眼裏に 美恵
 今日の新聞斜め読みする 三世子
 ボクサーのひたすら走り継ぐといひ 有子
 吼えてゐるのはあれば狼 有
 朔太郎遠きふらんすあくがれて 恵
 いついつまでも海へ石投ぐ 靖
 蹠の焼けてもそこに立ちつくし 斎
 浴衣はじめて恋もはじめて 靖
 螢火のなかで抱かれた隣村 世
 三年経てば人は別人 有
 担ひゆく回り地蔵のゆらゆらと 有
 典座にはない好きも嫌ひも 恵
 せせらぎを集め大河の月朧 有
 誰も知らない逃水の果 靖
 美酒を吉野の花に宿りして 全
 菜飯の香る膳に居並ぶ 世

連衆 永島靖子 山口美恵 高月三世子
佐々木有子

平成二十六年十月二十日首尾 於 桃径庵

温故知新

16…お地藏様が回り続ける意味

三年経てば人は別人
担ひゆく回り地藏のゆらゆらと
有子
三世子

右の付合い、もちろん古句ではない。恥かしながら筆者が捌いた半歌仙「高西風の」の巻（右ページ下段参照）の裏六、七句目だ。

今回のテーマは、文芸資料として古い、ということではなく、民俗として古い事柄に注目してみた。

「回り地藏」とは、そのときが初耳だったが、なにやら気になる匂いを感じ、いったいどんなものなのか、三世子さんにお尋ねした。

背に担える高さ三尺ほどの厨子に入った地藏尊を、そのための講に加わった家から家へ次々に受け渡し、巡回させる。そういう地藏信仰の形で、かつて日本のあちこちにあった風習だそうだ。一定期間仏間などに安置したら、次の家まで厨子を背に負って運んで行く。次から次へ受け渡し、ぐるぐる回すというところが、いかにも連句魂を刺激する。前句とも通うと思ひ、治定させていただいた。

治定した責任上、それについてもっと知っておかねばまずい。帰宅してから色々調べてみた。いまだきのネット環境は、こうしたとき便利だ。

家から家へ移動するペース、巡回地域の広さ、一巡に要する期間などは千差万別だが、岩手の遠野から、奈良の斑鳩、和歌山的那智勝浦などの西日本まで、多数の例を見つけた。全体像はしかと把握できないが、かつて全国的に分布していたことは確かだ。

二年前、平成二十六年には、NHKテレビの「小

さな旅 幸せ運ぶまわり地藏」というドキュメンタリー番組で、埼玉県羽生市に現存する講が紹介されたそうなので、NHKオンデマンドで視聴してみた。この回り地藏は、羽生市本川俣地区の百三軒からなる講を、ほぼ一年かけて一巡するという。

さらに調べてみると、拙宅から車で五分ほどの近傍、横浜市都筑区池辺町の滝ヶ谷戸というところでも、つい最近まで、集落の二十軒ほどの講中を、一軒につき十日ずつ滞在しながら回り地藏が移動し続けていた、ということがわかった。この地藏尊は二年半ほど前に巡回を終え、新たに作られた地藏堂に安置されたとのこと。隣の八所谷戸の地藏尊は今も巡回を続けているらしいが、詳細はわからない。

現在狛江市の泉龍寺に安置されている地藏尊は、昭和十七年まで、狛江、世田谷、北多摩一円、入間所沢、青梅、立川、東大和から練馬までを含む広い範囲を、各地域ごとに約一ヶ月、通算で一年かけて巡回していた。筆者の原風景の地である狭山丘陵周辺も、筆者の生まれる六年前まで巡回ルートに含まれていたのだ。調べるほどに一層心惹かれる。

起源は一応江戸時代中頃とされるものが多く、当時の流行とも言われるが、起源伝承の内容も時期も地域ごとに異なり、発祥時期の確証もない。奈良斑鳩の地藏尊はさすがに古く、聖徳太子の御製と伝承されているそうだが、これも確証はない。民間習俗で、しかも移動を続ける不安定なものだけに、確たる文献、資料がなく、結局はつきりしないのだ。

筆者の勝手な推測だが、何時発祥したか本当はよくわからない、ということ自体が、伝承よりずっと古い背景の存在を示唆していないか。異なる起源伝承を持って全国に分布していることから、江戸期のように近い時代の流行で広まっただけ、とは考えにくい。聖徳太子どころか、仏教伝来以前からの極

めて古い習俗に、仏教が後から乗ったのかも、などと無責任な想像が拡がる。そういえば地藏尊というのは、古い土着信仰と習合しやすい仏様だ。

回り地藏信仰の目的も、水害避け、子育て祈願など様々だ。目的の多様さと手段の共通性は、目的よりも「受け渡し、巡回させる」という手段そのものが本当の目的、習俗の核ではないかと思わせる。

文化人類学や民俗学に関心をお持ちの方なら、西太平洋ソロン海の「クラ交易」を連想するのはないか。機能主義人類学の開祖マリノフスキの『西太平洋の遠洋航海者』という著書で有名になった。文化も言葉も異なる諸島の諸部族の間を、赤い貝の首飾りと白い貝の腕輪という二種類の「宝物」が、それぞれ逆回りに危険な海路を越えて運ばれ、各地の財物と交換を重ねながら受け渡され巡回し続ける。三千年前から続くといわれる習俗だ。このリンクに加わる部族にとつて、隣の部族はこのリンクの維持に必要不可欠の存在になる。文化や言語の相異を越えた平和共存を保障する巧妙な仕組みだ。お地藏様の受け渡しもこれと似ている。日本にも三千年前から似た仕組みがあったとしても不思議ではない。

受け渡しあうことで関係が確保され、システムの全体が維持されるというのは、一種のコミュニケーションのシステムだ。言葉も人の間で受け渡しあうことによつてのみ維持される。人はコミュニケーションの動物、言葉の動物だ。

言葉で表現した「発想」を次々に受け渡すことでひとつの全体を形成する、という連歌系文芸は、言葉の深い本質に触れる文芸形式だ。その起源が伊那那岐、伊那那美の国生みという、古い神話の場面に擬せられてきたのも宜なるかな。「回り地藏」という言葉に直感的に惹かれたのは、そういう訳だったかもしれない。回りくどい話で申し訳ない。(斎)

●第百三十五回例会（明雅忌）が開催されました

昨年十月二十一日（水曜日）、江東区芭蕉記念館にて、第百三十五回例会（東明雅師十三回忌追善興行）が開催されました。（前号既報）明雅師の発句を立句にいただいで二十韻正式俳諧の後、八卓に分かれ、同じく明雅師発句による脇起源心実作を行いました。当日の源心八巻と二十韻一巻は今号のP2～5に掲載しています。

●第三〇回国民文化祭かごしま2015 文芸祭「連句大会」が開催されました

昨年十一月十五日（日曜日）、鹿児島市鹿児島アリーナにて、募吟各賞表彰式、続いて連句実作会が行われました。前日には、知覧方面、また桜島方面への吟行会と交流会が行われました。

●受賞

上記、第三〇回国民文化祭文芸祭「連句」大会にて、以下の四作品が受賞しました（既報）。これらの作品は今号のP13、P14に掲載しています。

文部科学大臣賞

半歌仙「母も子も」の巻
石川 葵 捌

鹿児島県知事賞

半歌仙「武蔵の鐘」の巻
木村ふう・生田日常義両吟

国民文化祭鹿児島県実行委員会会長賞

半歌仙「朝北風や」の巻
平林柳下・上田真而子両吟

鹿児島県連句協会会長賞

半歌仙「高西風の」巻
鈴木了斎 捌

●第百三十六回例会（初懐紙）が開催されました

一月十六日（土曜日）、原宿南国酒家迎賓館にて、第百三十六回例会（平成二十八年初懐紙）が開催され、故・桃径庵恭子宗匠に黙祷をささげた後、八卓に分かれて歌仙実作を行いました（詳細と作品は次号）。

●今後の予定

●第百三十七回例会 亀戸天神社藤祭興行
奉納正式俳諧 二十韻実作
四月二十一日（木曜日） 於 亀戸天神社

●第二十六回猫蓑同人会総会
六月十九日（日曜日）
於 新宿ワシントンホテル新館

●第百三十八回例会 平成二十八年年度総会
七月二十八日（木曜日）
於 江東区芭蕉記念館

●猫蓑基金にご協力ありがとうございます
匿名 平成二十六年十二月 二万円

基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店
猫蓑基金 普通預金 3376045

●訃報

●根津芦丈師ご令孫、根津旭雄様が昨年六月ご逝去。
●会員の古賀寛哉丈が昨年八月ご逝去。
●猫蓑会理事、日本連句協会理事、桃径庵式田恭子宗匠が昨年十一月ご逝去（前号既報）。

つつしんでご冥福をお祈りいたします。

●猫蓑会運営体制変更（新任理事）

式田恭子理事のご逝去にともない、十二月七日開催の臨時理事会にて、佐々木有子丈が後任理事（事務局担当）に任命されました。

●各種募吟にふるってご応募ください

●第三十一回国民文化祭・あいち2016「連句の祭典」
形式：歌仙
応募受付期間：平成二十八年二月一日～五月十日（当日消印有効）インターネットでも応募可。
<http://aichi-kokubunsai.jp/>

●バックナンバー

『猫蓑作品集』バックナンバーご希望の方は鈴木千恵子まで。『猫蓑通信』バックナンバーは創刊号以下すべて猫蓑会オフィシャルサイトで閲覧できます。

●猫蓑会オフィシャルサイト

<http://www.neko-mino.org>

季刊 『猫蓑通信』第百二号
平成二十八年一月三十一日発行

猫蓑会刊
発行人 青木秀樹
〒182-0003

編集人 鈴木了斎
印刷所 印刷クリエイト株式会社

東京都調布市若葉町2-21-16

東京調布市若葉町2-21-16

東京調布市若葉町2-21-16

東京調布市若葉町2-21-16